

「子どもとことば」考（Ⅱ）

—日本語（国語）に対する意識の変化と保育者養成の課題—

千古 利恵子

「ことば」は生き物で、時代とともに語意や用法が変わってきた。ICT化が進む現代では、語意や用法の変化に留まらず、新しい「ことば」の誕生と消滅が繰り返される。SNSやLINEでのコミュニケーションが日常化し「ことば」に関する意識は変化する。文化庁が平成7年から毎年実施する「国語に関する世論調査」は、そのことを明確に示す。本稿では、「ことば」に関する意識が幼児期の言語獲得に及ぼす影響を検証し、「ことば」の学習について私見を述べるものである。

キーワード：こども、言語意識、保育者養成、ICT化

1. はじめに

時代の流れに従うように「ことば」は変化し続ける。我が国の「国語」も古代から現代まで、その変化が留まったことはない。上代特殊文法は平安期のことば解明には適応できず、平安期の文法は現代語の解明には100%対応できないことから明らかである。現存する記録文献が極めて少ない時代から「話しことば」と「書きことば」は存在し、人間関係を築き時代の文化を創造している。骨格の変化から発音の違いは研究されているが、録音資料が存在しない以上、「話し言葉」の検証は限界があるだろう。だが、「話し言葉」に関する意識の変化を探る手掛かりは得られそうだ。

人は乳児期に「ことば」の獲得を開始する。「話し言葉」がメインの乳児期を経て「書き言葉」に触れる幼児期を迎え、「ことば」を通して自身の周囲にある世界を感じるようになる。乳幼児の多くが、家庭以外の場所で「ことば」を獲得する日々を過ごす。そこでの生活を通して、「ことば」すなわち「国語」の語彙や用法を修得してゆく。保育者によって伝達される、ともいえる

のである。保育者の「国語」に関する意識レベルが、子どもの「国語」能力を左右しかねない。保育実践の検証には、保育者の「国語」に関する意識の変化に注目することが重要ではないか。今回、幼児期の「言語獲得」を社会の「国語」に関する意識と関連付けるねらいは茲にある。

2. 「国語」に関する社会の変化

文化庁は、平成7年から毎年「国語に関する世論調査」を行っている。同庁は、調査目的を以下のように記している。

文化庁が平成7年度から毎年実施しているもので、日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

注目すべきは、国民の国語への興味・関心を喚起する、と明記していることである。「ことば」を使用する時、興味や関心の対象は「ことば」自体ではない。多くの場面では獲得している語彙

の中から対象との関係を直感ではかり、使用する「ことば」を選択して使っているといっても良いだろう。このことから、この調査結果は「ことば」の活用法修得の教育課題を把握するための有効な資料だと考える。なお、この調査は毎年「全国16歳以上の男女」を対象に「一般社団法人中央調査社に委託し個別面接」の方法で実施されている。

今回の考察には、文化庁がホームページに公開している平成26年度から平成29年度のデータを参照した。以下は、各年度調査項目である。

平成26年度

- 1、社会や家庭における言葉遣いについて
- 2、外国人に対する日本語教育について
- 3、手書き文字の字形と印刷文字の字形について
- 4、言い方の使用頻度について
- 5、新しい複合語、省略語について
- 6、慣用句等の意味・言い方について

平成27年度

- 1、言葉への関心
- 2、場面ごとの敬意表現
- 3、情報化の中でのコミュニケーション
- 4、「ら抜き」、「さ入れ」、「やる／あげる」
- 5、言葉に対する感覚
- 6、慣用句等の意味・言い方について

平成28年度

- 1、コミュニケーションの在り方・言葉遣いについて
- 2、相手に配慮したコミュニケーション
- 3、情報化の中でのコミュニケーション
- 4、書き言葉のコミュニケーション
- 5、具体的な場面における言葉遣い
- 6、新しい表現や、慣用句等の意味・言い方

平成29年度

- 1、国語や言葉への関心
- 2、句読点や符号の使い方

- 3、表記の決まり
- 4、メールの書き方
- 5、外来語についての意識
- 6、新しい表現や、慣用句等の意味・言い方

調査項目を比較すると、平成26年から「ことば」の関心が急激に変化していることが分かる。

平成26年度は、家庭や社会での「言葉遣い」や「手書き」「印刷」文字の「字形」に注意が向いている。学校教育が重視する「ことば」に関する知識や使い方が重要視された調査といえる。平成27年度は、従来は誤りとされた「ら抜き」などが頻繁に使用され「ことば」の変貌に注目している。「場面ごとの敬意表現」項目の設定は、従来の待遇表現とは異なる人間関係を想定し、「話し言葉」の変化を検証したからだろう。「情報化」が言語生活や人間関係に影響を与え、「ことば」を「コミュニケーション」との関係から捉え始めていることが分かる。平成28年度になると、「ことば」の調査は「コミュニケーション」を前提に実施される。「書き言葉」に限定した項目が設定され、対面での「コミュニケーション」重視の傾向が顕著になる。平成29年度には、「メールの書き方」が項目に挙がる。表記上の規則が、社会のICT化が進む中で「国語」教育が取り組むべき課題を提示しているといえよう。

わずか4年の調査項目を比較しても「ことば」を使用する社会のしくみや人間関係は激変し、「ことば」自体も変貌し続けていることが確認できるのである。

3. 児童文化財とICT

人が言語を獲得することは、社会で使用されている「ことば」の継承といえるだろう。子どもの場合、継承は「遊び」の中で進むのである。生活の中心に「遊び」がある幼児期は、各時代の社会が提供する児童文化財の影響を大きく受

けるといえる。絵本・玩具・遊具・童謡・伝承遊びなど、子どもの生活に深く関わる児童文化財は、大人が創造し与えている。ブランコや滑り台のように、それ自体が「ことば」を直接伝える児童文化財ではないが、「遊び」の傍らには見守る大人が居り話し声も聞こえる。このことから「ことば」を伝える児童文化財の一つに位置づけられるだろう。童謡はメロディーに乗った「ことば」に触れることができるものである。絵本は、従来から「読み聞かせ」が盛んなように、大人の読みを通して「ことば」に対する興味を育てるものである。しかし、絵本を介した大人と子どもの「ことば」のやりとりに変化が生じている。絵本は、書籍から動画へと姿を変えている。YouTubeで無料配信される絵本は多く、そこから聞こえる「ことば」は声優が発する聞き取りやすい言葉で、子どもが日常的に耳にする発音とは異なることもあるだろう。子どもにとっては、自身を擁護してくれる人が傍らに居なくても、「ことば」を聞くことができるのである。

ネット上に配信される動画は絵本や童謡だけではない。手遊びや折り紙、子どものゲームなど多種多様なものが提供されているので、大人が傍らに居なくても子どもは一人で画面から聞こえる「ことば」に出会っている。「遊び」は「ことば」との出会いになるのだが、その媒体である児童文化財は従来の形を保ちながら、提供の方法が変わろうとしているのである。無論、子育てに役立つ情報メディアなどを見ると、乳児に与える玩具としては、「ガラガラ」や「歯がためのおしゃぶり」の人気は以前と変わらず高いようだ¹⁾。この様子からすると、乳児期にはICTの影響は一見無さそうだが、泣く乳児をあやす時にはスマートフォンを枕辺に置くという話を聞くと、乳児期の生活にも変化が起り始めて

いるといえよう。

児童文化財が「ことば」の継承の役割を終えないからには、それらとICTとの関わりが子どもの「ことば」獲得にどのような影響を与えるのか、注意を払わなければならない時代を迎えたといえる。

4. 「国語に関する世論調査」が提示する課題

総務省の調査によると、2017年のスマートフォン所有率は75.1%、パソコン72.5%、タブレット型端末36.4%で、モバイル端末全体では94.8%になる。²⁾ これらの数値は、現代人の生活がネット情報と切り離せない状況にあることを示している。スマートフォンが社会生活を営む上での必需品になっている現代、モバイル端末が「ことば」をどのように変えてゆくのか、想像することは難しいだろう。総務省の「国語に関する世論調査」は、変化の一端を示すかもしれない。

4-1 言葉遣い

平成18年12月15日、新しい教育基本法が成立し、同月22日に公布・施行された。我が国の教育の方針は「第1章教育の目的及び理念」に明記されている。

第1条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

「教育」として行われる「ことば」の学習は、この法律の基に行われるのである。しかし「ことば」獲得は誕生と同時に始まり、最初の学習の場は家庭ということになる。文化庁が家庭での「ことば」に対する意識を重視していたこと

は、平成26年度の調査項目から明らかになる。「社会や家庭における言葉遣いについて」の調査は、7質問への回答形式で実施されている。次に、各問とその集計結果を掲出しておく。

なお、平成26年度の調査対象者数は3493人、有効回答数1942人、有効回答率55.6%である。

問1：今の国語は乱れていると思うか。

- A：乱れていると思う（73.2%）
 乱れていないと思う（23.5%）
 分からない（3.3%）

問2：家庭で言葉遣いについて注意されたか。

- A：注意された（56.1%）
 注意されなかった（43.5%）
 分からない（0.4%）

問3：言葉遣いを誰から注意されたか。

- A：母親（61.6%）父親（27.4%）
 祖母（6.0%）祖父（2.6%）

問4：家庭で受けた言葉のしつけについて、現在どう思うか。

- A：適切にしつけられたと思う（61.2%）
 もっときちんとしつけてくれれば良かったと思う（12.9%）
 厳しくしつけられ過ぎたと思う（3.3%）
 特に何も思わない（21.3%）
 分からない（0.4%）その他（0.9%）

問5：中学生・高校生の話を聞いて、言葉遣いが乱れていると感じるか。

- A：乱れていると感じることがある（72.8%）
 乱れていると感じることがない（22.5%）
 分からない（4.7%）

問6：小学生の言葉遣いに注意を与えるべき人は誰だと思うか。

- A：父親・母親（96.4%）学級担任の先生（91.2%）
 知らない通り掛かりの大人（20.1%）

その子を知っている近所の大人（49.7%）
 友達（45.2%）弟・妹（35.9%）その子
 を知らない通り掛かりの大人（20.1%）

問7：子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うか。

- A：テレビ（81.4%）母親（72.3%）父親（67.8%）
 友達（63.4%）ゲーム機（47.5%）漫画（45.0%）
 インターネット（39.2%）兄弟姉妹（37.7%）
 学校や幼稚園・保育所の教員や保育士（34.2%）
 祖父母（29.8%）携帯電話での通話（28.2%）
 子供向けの本や雑誌（25.3%）地域の大人（11.9%）
 ラジオ（11.2%）国語の教科書（10.0%）

問1「国語の乱れ」の受け止め方は、個人で異なるはずだ。HPでは平成11,14,19年の調査との比較があり、「乱れていると思う」は減少傾向に「乱れていないと思う」は増加傾向にあることが分かる。平成11（1999）年度は「乱れていると思う」の回答が85.8%で、この頃を境にそれまでとは異なる「ことば」が使用され始めたといえそうだ。1998年にWindows98が発売され、パソコンへの興味が高まるのだが、それ以前に通信サービスへの関心には変化が起きている。総務省の調査によると1996年頃から固定電話から携帯電話への移行が始まり、1999年の契約数は6,996,302、（人口普及率47.5%）、平成26（2014）年は15,798,033（同104.5%）、平成29（2017）年には16,449,236（同109.4%）が契約を結んでいる。³⁾携帯できる通信機器の普及は、「話す」機会を増やすと同時に「話し言葉」に掛けられていた制約を緩和したといえる。平成19年までは、それまでとは異なる語彙や表現に違和感を覚えた人も多かったようだが、平成26年度にはその違和感が薄れている。人々が「ことば」の変化

を受け入れていくことが分かる。問2「言葉遣い」を「注意されなかった」の回答（43.5%）が、平成12年度（26.8%）19年度（39.3%）と比べて増加していることも肯ける。新しい言葉が社会に受け入れられ、使用頻度が増えると「市民権」を得たといわれる。問4「言葉のしつけ」を「適切にしつけられたと思う」の回答が、平成12年度より19年度が、19年度より26年度が増加している。言葉に限らず「しつけ」は、その時代の生活者が感じる「違和感」を無くすための教育だと考えるなら、問4～問6は「ことば」に対する関心の変化を探る上で、興味深い質問だといえる。

多くの人は、自身が使用する「ことば」は、いつ・誰から教わったのか、気に留めたことなどないだろう。「ことば」は成長過程で獲得してゆくから、家庭で覚えるという意見も多いだろうが、幼児期を家庭外で過ごす時間が増えた現代は、「ことば」獲得の場と機会は多様と考えるのが良いだろう。家庭外で行われる「ことば」の習得は、保育現場が担っていることが多い。幼稚園教育要領・保育所保育指針にのっとり、保育現場で進められている。

幼稚園教育要領「第2章ねらい及び内容」に、「言葉」獲得の意図を次のように記している。

言葉

〔経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。〕

幼稚園では「ことば」に対する関心と言語感覚の育成をねらいに据え、言語教育に取り組んでいる。就学後は、主に教科「国語」を通して言語教育が行われる。学習指導要領には、教科「国語」の目標を次のように記す。

目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う

(1)「ことば」の活用 (2) コミュニケーションの重要性と効果 (3) 言語感覚の育成と「国語」に対する敬意と向上を記し、「国語」教育の方向を定めている。問7「子供の言葉遣いに与える影響が大きい人やものはどれだと思うか」は、「言語感覚を養う」上で影響力を持つ媒体を把握するには有効な質問だろう。「ことば」に対する関心は、多様な媒体に育まれるともいえるのではないか。平成26年度の調査結果の中には、現状とは乖離したものがある。モバイル端末の影響が、テレビの影響力（81.4%）に匹敵するのではと想像する。核家族化が進み、地域の人間関係が希薄になると、祖父母や地域の大人から受ける影響の減少傾向は続くかもしれない。「国語」の教科書の影響力（10.0%）は、教科「国語」の教育課題を提示するともいえそうだ。学習指導要領にある「国語で表現する資質・能力」とは何をいうのだろうか。茲に、言語教育に取り組む上での課題があるといえる。

4-2 表現能力

「国語」による表現能力を考える時、日本語の

「美しさ」「正しさ」に注目が集まるようだ。平成27年度の調査は、「言葉への関心」から始まる。関心の度合いを探るために「毎日使っている日本語を大切にしているか」「美しい日本語があると思うか」「どのような言葉に出会ったとき、心と心を結ぶ言葉の大切さを感じるか」の3問を設定している。なお、この年度の調査対象者数は3589人、有効回答数1959人（有効回答率54.6%）である。

「大切にしている」と回答した比率は78.5%で、平成13（2001）年度の69.1%、20（2008）年度の76.7%より増加している。「大切にしている」という気持ちは、年齢が高くなるほど高くなる傾向がある。「美しい日本語があると思う」の回答比率は90.8%で、平成13年度84.8%、20年度87.7%と比べるとさらに増加している。「ことばの美しさ」の定義は難しいはずだ。にもかかわらず、9割強が「美しい日本語」の存在を確信しているのは何故なのだろう。学習指導要領の目標(3)の文言に従えば、「言葉がもつよさを認識することで言語感覚が養われ、国語の大切さを自覚し尊重するようになり、国語の能力の向上を図る態度が養われた」といえるのかもしれない。無論、意識と実現との間には、多くの場合ズレが生じる。「美しい日本語」に関心を持つ人々が、コミュニケーションの場面で、常に「美しい日本語」を使えるのだろうか。この疑問への回答は、平成28（2016）年度の調査結果が参考になりそうだ。同年の調査には6項目が設定され、うち4項目には「コミュニケーション」という言葉を含む。他の2項目の1つは「具体的な場面における言葉遣い」で、他者との関係を前提にしたコミュニケーションに関わると質問といえる。なお、同年の調査対象者数は3566人、有効回答数2015人（有効回答率56.5%）である。

「コミュニケーションの在り方・言葉遣いにつ

いて」の項目中に、「きちんとした言葉遣いができないと、社会から認めてもらえないという雰囲気を感じるか」という質問がある。「そう感じる」（35.2%）「ややそう感じる」（39.6%）で、7割強が「社会から認めてもらえない」と感じている。年齢別にみると、以下の結果になる。⁴⁾

【言葉遣いに対すると社会からの承認意識(年齢別)】

年齢	そう感じる	ややそう感じる
16～19歳	48.7%	42.1%
20代	23.8	50.0
30代	30.4	50.0
40代	36.0	49.5
50代	33.7	43.8
60代	34.9	37.6
70歳以上	39.0	24.1

16歳～19歳では、9割強が「認めてもらえないと感じる」と回答している。文部科学省の令和元（2019）年8月8日の報道発表に拠れば高等教育機関への進学率は、82.6%である。平成28年度はこれより下回るとはいえ、回答者の大半が教育機関に在籍中とすれば「認めてもらえないと感じる」根拠はどこにあるのだろうか。30代以上は、社会生活を営む中で「認めてもらえないと感じる」と実感した上の回答だろう。16歳～19歳の9割強に「認めてもらえないと感じる」と言わせたのは、学校教育の成果である一と考えるのは誤りだろうか。

言語教育に「美しい日本語」「正しい日本語」を意識することが不要とは思わない。しかし、コミュニケーションについての検証・考察を行う場合も、「美しい日本語」「正しい日本語」に配慮が必要になるのだろうか。平成28（2016）年度の項目「情報化の中でのコミュニケーション」「書き言葉のコミュニケーション」を検討する場合にも、日本語に「正しさ」「美しさ」を求める

姿勢は温存されるのだろう。言葉を獲得することで「思考力や想像力を養う」ならば、感性を重視する「言語感覚」で育てられるのか—という問いかけが不可欠だと考える。

5. 子どもの「ことば」への関心

保育現場では、日々の生活以外にも生活発表会や運動会、七夕などの年中行事をはじめ様々な取り組みがなされている。子どもたちは、それらを通して、人との関わりを体験し、他者との「ことば」の交換を積み重ねる。乳幼児期では、子ども同士より保育者との会話が多くを占めることから、子どもの言語に関わる検証には、「他者＝保育者」を前提に行う必要がある。

5-1 保育者の「ことば」

幼稚園教諭免許・保育士資格は、高等教育機関で取得することが多い。養成校の一教員として、保育者が「ことば」への関心を持てるか否かは、指導法にも左右されるのではないか、という思いに捕らわれる。「ことば」獲得に配慮する保育を実践するには、保育者が自らの「ことば」に対する関心の深まりが必要だ、と考える。担当科目「子どもと言葉」の授業概要と到達目標が、そのねらいに即しているか、検証してみる。

概要

絵本に代表される児童文学や童話などの「言葉」の変化に注目し、児童文化財と言語獲得環境との関係を把握する。併せて、ICT化の社会が、子どもの言語活動にどのような影響を与えるのかを考える

到達目標

1. 「言葉」は人間関係を構築するために必要であることを確認し、言葉を使う楽しさや豊かな表現力について、子どもの発達と関係付

けながら考えることができる。

2. 日本語の特徴を児童文化財の歴史・種類を通して確認し、児童文化財を実践で活用することができる。

3. 子どもの豊かな言語感覚を育成できる「言葉」の基礎知識と指導力を身に付ける。

4. 保育の実践に活かせるICTについて考えることができる。

到達目標を設定するにあたり、意識したのは「言葉」の変化に関心を持たせることである。文化庁の世論調査からも明らかのように、「国語」に関する意識の違いは年齢差と密接に関係するからである。

保育現場は、機関の運営・管理にあたる園長や主任と保育の担当者達から成り、そのメンバーの年齢幅は広い。定年制度がある公立に比べると、私立の場合はさらにその傾向が強そうだ。各世代が獲得している「ことば」は、時代の変化に影響されず受け継がれるものがある一方、若年齢層には理解し難い言葉もある。子どもと保育者の間にも、保育者の世代間ギャップほど顕著では無いとしても、同様の状況があると想定するべきだろう。絵本や童話の「ことば」に出会った子どもの様子は、それらを準備した保育者の期待通りの反応ばかりではないはずだ。そのような時、保育者には、期待外れの原因を「ことば」に関わる問題として検討する姿勢が必要になるのである。成長すれば、子どもが自身の好みで絵本や童話を選択するが、幼児期には大人が選んだものに触れるだけである。仮に今、70代と20代の二人が絵本や童話を選ぶとしたら、選ぶ作品は必ずしも一致しないだろう。生活した時代が異なる二人の「ことば」に対する関心は異なり、作品の語彙や文章表現の嗜好や志向に違いが生じるのは、当然のことといえる。そこで重要になるのは、「子どもの言語感覚の育成に及ぼす影響」を「各世代の国語に

対する意識の相違」をふまえて考える態度である。そのためには、担当科目「子どもと言葉」の到達目標とした4項目の学習は、受講生一人一人が自身の「国語に関する意識」を明確にすることから始めなければならないと考えるのである。

5-2 子どもの歌ランキングと「ことば」

ネット上には、年齢別、子どもの歌ランキング調査が幾種類もあり、次に掲出する「子どもが喜ぶ歌。人気の童謡一覧」は、その一つである。⁵⁾ここでは「こどものうた。人気の童謡20選」⁶⁾と「動物・虫の歌」「体をつかう歌」「食べものの歌」「乗りものの歌」「春の歌」「夏の歌」「秋の歌」「お正月・冬のうた」「クリスマスの歌」「泣き止む歌」「童話」「その他」に分け、ランク付けしている。その中から「動物・虫の歌」の結果を以下に紹介する。

動物・虫の歌

ドナドナ おすもうくまちゃん めだかの学校
ぞうさん こぎつね おうま お玉じゃくしは
蛙の子 うさぎのダンス ちょうちょう いけ
のこい 森のくまさん 赤とんぼ 山の音楽家
ぶんぶんぶん 金魚の昼寝 木の葉のお船
パンダうさぎコアラ アイアイ ジャングルポッケ

言うまでもなく「〇〇ランキング」といわれるものは、特定の組織や団体が自らの活動の優位性を表明する目的を持つと推測できることから、その信憑性は疑うべき点も多い。しかし、その順位は、調査時の社会がどのようなものを評価し、受容しようとしているのかという傾向を示している、と考えることはできるだろう。「動物・虫の歌」に選ばれた「ジャングルポケット」(作詞 長谷川勝士 作曲 福田和禾子)の歌詞を例に、子どもが興味をもつことばや表現を考えてみる。

ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
ほくのポケットはジャングルだ
いろんなどうぶつすんでいる
ポケットのなかにすんでいる

①ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
一ひきめ とり出した
ガーオ ガーオ
ライオンがきばをむく

②ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
二ひきめ とり出した
キョロロンロン キョロロンロン
キリンさんがくびのばす

③ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
三ひきめ とり出した
ブルルンルン ブルルンルン
かばさんがおおあくび

④ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
四ひきめ とり出した
ボンボコボン ボンボコボン
ゴリラがとび出した

びっくりぎょうてんおおさわぎ
うちじゅう町じゅうおおさわぎ
びっくりぎょうてんおおさわぎ
うちじゅう町じゅうおおさわぎ

ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ
ジャングルポッケ ジャングルポッケ
ジャングルポッケ

この歌詞には同音・同語の反復が多くある。「ジャングルポッケ」の3回繰り返して始まり、6回の繰り返して曲は終わる。「びっくりぎょうてんおおさわぎ／うちじゅう町じゅうおおさわぎ」を2回繰り返すことで「おおさわぎ」を4回登場させる。①～④連は「ジャングルポッケ」3回の繰り返した後、異なる動物を登場させ、その特徴を擬声語で表現する。繰り返される「ジャングル」と「ポッケ」との接続は、大人の言語活動では先ず有り得ない。「びっくりぎょうてんおおさわぎ／うちじゅう町じゅうおおさわぎ」は、例えば「びっくりぎょうてんしておおさわぎ／うちじゅうも町じゅうもおおさわぎ」というべきところから助詞を省いた表現とすれば、大人でも然程違和感は覚えなだろう。

上記の歌詞に使用された単語の接続や表現、音韻の反復やオノマトペの傾向を精査すると、子どもが興味をもつ「ことば」の特徴の一端に触れることができるはずだ。⁷⁾

子どもが好む歌詞の検証は、言語感覚を育む童謡を選択する上で重要な作業といえそう。今後この作業を絵本でも行い、語彙や表現を出版年別に区分すると、各時代の国語使用傾向が明らかになるだろう。同時に、出版された年代の「国語に対する意識」の一端を知ることでもできるはずだ。

正高信男は、子どもが言葉の意味を理解してゆくことについて、以下のように述べる。

- ・子どもが個々の単語を大人から教わったとしても、必ずしもその字義通り受け入れるばかりではない
- ・身体で対象物とかかわるなかで、語の意味する内容をいわば「体得」していく

その上で、東京電機大学教授・小林晴美の研究を次のように紹介する。

「身体が発する情報が、ことばのカテゴリー化

に重要な役割を果たすのは、子ども自身の対象とのかかわりに限らない。周囲の大人から語彙を提示される場合にも類似の現象が生じていることを、小林は、メリーランド大学大学院在学中に行った博士論文執筆のための研究で実験的に検証している。」⁸⁾

人は、日常生活の中で多種多様な「ことば」に出会い、その語彙や語意・表現内容を理解している。その行為が可能になったのは、乳幼児期以降の教育に拠ると考えがちだ。しかし正高は、大人が教えるからではなく「体得」するのだという。子どもは、誕生するや多くの「ことば」を耳にし、やがて大人が準備し与えた絵本などの表記を目にすることで書き言葉に出会いながら、自身が使用する「国語」を獲得してゆくのである。子どもが「ことば」を理解するのは、主体的な行為で、子ども自身の興味・関心に委ねられるということだ。⁹⁾ 歌詞や絵本の「ことば」を検証し子どもの言語獲得に活用する場合、正高・小林両氏の指摘をふまえなければならない。

まとめ

2011年、文部科学省は「人の一生において、幼児期は、心情、意欲、態度、基本的な生活習慣など、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である。」と幼児期の重要性を主張し、成長の過程を「幼児は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、情緒的・知的な発達、あるいは社会性を涵養し、人間として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得していく」という。さらに、子どもが育つ社会の変化を「地域社会の教育力の低下」「家庭の教育力の低下」の2点から解説し、今後の教育の取り組みの方向性を「1 家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進 2 幼児の生活の連続性及び発達や学

びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」と、幼児期の教育の充実を促している。

「子ども」は、その時代に生きる「大人」の人生観や価値観を受け継ぎ成長することから、その基盤を形成する生活環境の重要な空間と時間を提供する保育現場の任は大きいのである。ICT化が進み、子どもの「言語環境」がどこまで変化してゆくかは推測できない現代であるから、保育者には「国語に関する意識」を深めることが要請されるにちがいない。しかし、定着率が伸び悩む保育現場では、構成メンバーの年齢差は広がり続け、「国語に関する意識」の相違も加速するだろう。

今回、文化庁が実施してきた「国語に関する世論調査」を比較してみると、①国語に関する意識は年齢により異なること ②言葉（国語）獲得に作用するツールの主流が、タブレット端末に移行していること ③「コミュニケーション」が前提になると、「国語のきまり」が変化していること、が分かった。併せて、子どもの言語獲得は、大人が準備し与える児童文化財を媒介に進んでゆくことも、再確認できた。

幼児期を保育現場で過ごす現代、保育者の話す言葉が子どもの「国語意識」を育むとさえ言える。社会のICT化は、対面での国語の交換より、ネット上での交流に有効な国語の獲得に力点が移ろうとしている。従って、社会の変化を視野に入れた授業内容か、受講生が「国語」に対する興味・関心の重要性を認識する指導法といえるのか—これが直近の課題であり、改善には、自身の「国語に関する意識」確認が必要であると考えている。本稿で提示した調査結果や課題への取り組みは稿を改め報告したい。

注

1) 妊活・妊娠・子育てに役立つ情報メディア

「ままのて」

<https://mamanoko.jp/articles/27917#3602217>
2019.10.10 参照。

- 2) 総務省 HP
www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/h_tml/nd252110.html
「第2部第2節 ICTサービスの利用動向」参照。
- 3) 総務省 HP
「移動体通信（携帯電話・PHS）の年度別人口普及率と契約数の推移」参照。
- 4) 「日本語を大切にしているか（年齢別）グラフ」参照。「日本語の大切さ」を考える場合、性的マイノリティへの配慮がなされているとはいいいながら、現在の社会通念では、ことば遣いや文章表現から性差を完全に排除することは難しい。2008年、山中靖子は「現代日本語の性差に関する研究 - 文末表現を中心に -」（『東京女子大学言語文化研究（Studies in Language and Culture）17（2008）』、pp.87-100）で、話し言葉の変化を性差から論じているが、「大切さ」に関する意識の変化は、遅々としていそうだ。
- 5) 株式会社ラグインターナショナルミュージックスタジオラグ 2019.10.10
<https://kids.studiorag.com/nursery-songs?disp=more>
- 6) 「人気の童謡」として挙げられている以下の20曲は、いずれも往年の作曲家が曲を付け、長年歌い続けられている童謡である。
歌えバンバン 山本直純／おぼけなんてないさ 峯陽／やぎさん／ゆうびん 團伊玖磨／犬のおまわりさん 大中恩／大きな栗の木の下で／手の平を太陽に いずみたく／さんぼ 井上あずみ／すいかの名産地 traditional／おもちゃのチャチャチャ 越部信義／あめふりくまのこ 湯山昭／雨降りお月さん 中山晋平／メリーさんのひつじ／かえるの合唱／手をたたきましよう／この道 山田耕筰／アルプス一万尺／サッチャン 大中恩／とんぼのめがね 平井康三郎／マイムマイム／ねこふんじゃった
- 7) 子どもの興味は「想像」と密着している。ヴィゴツキーは著書『子どもの想像力と創造』（2012、新読書社）で「想像力は人間を現実から連れ去ることも連れ戻すことも同様にできます」（p.60）と述べる。読売新聞「編集手帳」に掲載された次の文章も、その一例といえるだろう。
「おにいちゃんと ひみつきちをつくった
へやのすみっこに・・・」（小学2年・2018.10.13）
「おとうさん おてがみ さめちゃうよ」
（幼稚園年少・2019.1.4）

想像には「ことば」が不可欠であることから、子どもが興味を示す語彙・表現の把握は、重要になる。

- 8) 正高信男、子どもはことばをからだで覚える、中公新書、2004、PP.129～131 から抄出。
- 9) 本山益子は、『からだからはじまる保育のアート』（市村出版、2018、p. 11）「子どもの感性は生活の中で磨くものだ」と述べ、そのためには「言葉で伝えることに慣れていく大人だからこそ、身体表現あそびを経験してほしい」と保育者養成の課題を提示する。「感性」と「ことば」の関係を考察する上で、重要な提示といえる。

参考文献

- ・池谷壽夫、〈教育〉からの離脱、青木書店、2000
- ・高階玲治編、国語科から発展する総合的学習の学力、明治図書、2001
- ・アイヴァー・グッドソン／パット・サイクス、ライフ・ヒストリーの教育学、昭和堂、2006
- ・加賀野井秀一他監修、あたらしい教科書 ことば、プチグラフィック、2006
- ・中村隆康、暴走する能力主義、ちくま新書、2018
- ・渡辺弥生、子どもの「10歳の壁」とは何か？、光文社新書、2018
- ・西洋子・本山益子・岡本雅子、からだからはじまる保育のアート、市村出版、2018

